自ら気づき主体的・能動的に深く読む姿勢の養成を目指して
－『大鏡』「道長と女院詮子」の脚本化授業－

池山　朋花

はじめに

受身の読解ではなく自ら気づき主体的・能動的に深く読む姿勢の養成を図り、３年生の古典Ａ『大鏡』「道長と女院詮子」の授業において、脚本化（番組化・劇化）を授業で取り入れた。同じ教材を用いて、昨年度は番組化、今年度は劇化の活動を行った。

１　昨年度の取り組み

番組化：道長に内覧の宣旨が下る場面までをテレビ番組形式で発表する

（１）単元の指導計画

	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
第１次 ３時間	・文学史について理解する。	・教科書の解説などを参考にして、『大鏡』の特徴と文学史的位置づけや、当時の歴史的背景、登場人物の相互関係をつかませる。
	・本文の内容をとらえる。 定期考査	・重要語句や文法事項について確認しながら、現代語訳させる。
第２次 ３時間	・５人×８チャンネル(班)作り、放送局名(班名)を考える。	・活動の意図を伝える。
	・補助資料を読み取り、情報を活用する。	・ジグソー法により、道長の人物像や『大鏡』『栄花物語』などについての補助資料を分担して読み込ませる。 ・自班に戻り、担当資料について発表しあう。情報を結び付け、登場人物の人物像や歴史的背景を捉えさせる。
	・人物像や心情が最もよく伝わる番組形態を考え、番組を制作する。 ・番組名(発表タイトル)を考える。	・補助資料から読み取った情報を総合し、登場人物の人物像や心情を考え、最もそれを表現できる番組形態を考えたうえで、「台本ワークシート」にまとめさせる。 ・必要に応じて、他の資料も調べさせる。ネット検索の場合は、出典を明確にし、原文にあたらせる。
	・発表の準備をする。	・必要に応じてフリップや小道具、パワーポイントを作っても良いこととする。
第３次 ３時間	・活動内容の確認をする。	・活動の意図を伝える。 ・ルーブリックの説明を行う。
	・各班番組を発表する。	・視聴班は自分の「台本ワークシート」にメモをとりながら視聴させる。

	・発表後、制作班は自己評価を行い、視聴班は番組評論と評価をワークシートにまとめ、相互評価を行う。	・ルーブリックに従って、制作班は自己評価、視聴班は番組評論の内容を、「評論ワークシート」に記入させる。評価は班内で話し合いにより決定させる。 ・最初の班の発表のみ、教員による評価の説明を行う。
	・発表の次時、活動の振り返りとして心情を全体でまとめる。	・各班の「評論ワークシート」をまとめたものを配布し、心情を確認させたり、教員から各班の良かった点や改善点をコメントしたりする。
	・相互評価を、自班や個人評価に還元する。	・他班評価も踏まえ、ルーブリックで自班を再評価させる。 ・他班評価や自班評価を見て、個人で活動を振り返り、自己評価させ、「振り返りシート」に記入させる。 ・使用したワークシートをすべて提出させ、教員による評価を行う。

（2）考察

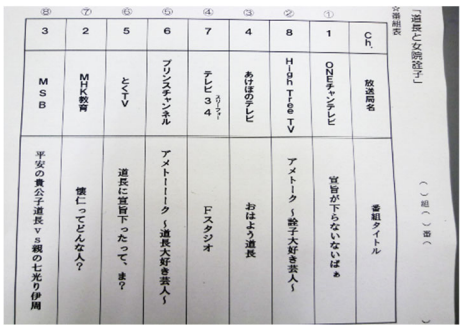
ア　実践のねらいと工夫した点

・本文の読解としては、授業や定期考査を経て一通り読解ができている第１次の段階から、読みをさらに深めさせることを目的として、第２次より脚本化を取り入れた授業を行った。活動では、〈道長に内覧の宣旨が下った場面まで〉を扱った。この学年は前年に『史記』「鴻門之会」の劇化を経験していたため、パフォーマンス課題のレベルをより高く設定して番組化形式で発表させることで、人物像や心情が最もよく伝わる表現の仕方（番組形態）まで考えさせた。

・第２次から授業を図書室で行った。補助資料だけでなく必要に応じて各班が自由に資料を探すことができた。また、隣教室への気兼ねがなかったことも、班の話し合いでの活発な意見交換につながった。

・班番号＝チャンネル、班名＝放送局、発表タイトル＝番組名とみなし、番組化であることを意識させた。どの班も命名にこだわったり、実在のテレビ番組のスタイルを下敷きに表現方法を工夫したり、番組内で使うフリップを作る班もあったりするなど、取り組みへの意欲の高さがうかがえた。

【写真１　フリップを作成する班】



【写真２　各班こだわりの命名】

イ　成果

この活動を通して、登場人物の人物像や心情、本文の内容について生徒の理解が深まったことはもちろん、受身の読解ではなく、意欲・積極性・創意工夫など、生徒の力を多方面にわたって引き出すことができたことを実感した。特に、劇形式ではなく「番組化」と

したことで、様々な表現の切り口（語り方）まで工夫させることができたことが、この活動の特徴である。例えばインタビュー形式や討論形式など、話し合いによって理解を深めた人物像や心情を、最も効果的に表現できる番組形態を各班が考えていた。このような自由度の高さが活動の「おもしろさ」につながり、積極的な取り組みにつながったと思われる。

ウ　課題

客観的な相互評価が困難であった。評価では、「人物理解」や「心情把握」という内容面と、発表までさせたからこそ「表現の工夫」という構成面についても評価観点に入れていた。しかし番組形態や場面の限定が緩やかであったため、多様な各班の発表を比較しづらく、また、視聴班が発表を見てその場ですぐに内容面を客観的・正確に相互評価することが難しかった。結局、内容面よりも番組構成や演技の上手下手やインパクトによって、相互評価が左右されてしまった。

２　今年度の取り組み（昨年度の反省を踏まえた実践の成果と課題）

劇化：道長・詮子・帝・伊周それぞれの人物像を捉えた上で、道長に宣旨が下った時点での心情と行動を考えてワークシートを作成し、劇化して発表する

(１) 単元の指導計画　　は反省を踏まえた工夫

	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
第１次 ３時間	・文学史について理解する。	・教科書の解説などを参考にして、『大鏡』の特徴と文学史的位置づけや、当時の歴史的背景、登場人物の相互関係をつかませる。
	・本文の内容をとらえる。 定期考査	・重要語句や文法事項について確認しながら、現代語訳させる。
第２次 ３時間	・５人×８班を作る。	・「活動の手引き」を用い、活動の意図や目的、内容を確認し、活動の見通しを持たせる。
	・補助資料を読み取り、情報を活用する。	・ジグソー法により、道長の人物像や『大鏡』『栄花物語』などについての補助資料を分担して読み込ませる。 ・自班に戻り、担当資料について発表しあい、「ワークシート①資料まとめ」にまとめる。情報を結び付け、登場人物の人物像や歴史的背景を捉えさせる。
	・登場人物４人（道長、詮子、帝、伊周）それぞれについて、人物像を考え、それをもとに宣旨が下った時点での心情やその心情を表す行動を考える。	・補助資料から読み取った情報を総合し、登場人物の人物像、心情、行動を班で話し合って考え、各自で「ワークシート②原稿」にまとめさせる。 ・必要に応じて、他の資料も調べさせる。ネット検索の場合は、出典を明確にし、原文にあたらせる。
	・発表の準備をする。	・発表は「ワークシート②原稿」をもとにするが、読み上げるだけの発表は不可とする。 ・必要に応じて小道具を作っても良いこととする。 ・「ワークシート②原稿」を提出させ、教員が班数分をコピーする。

第３次 ３時間	・活動内容の確認をする。	・活動の意図を伝える。 ・「ワークシート③評価シート」を用いて、ルーブリックを用いた評価方法を確認する。
	・各班発表する。	・他班の発表を見て得た気づきを自分の「ワークシート②原稿」にメモさせる。
	・発表後、相互評価（発表班は自己評価）する。	・評価はルーブリックに従って、班内で話し合いにより決定させる。 ・発表をもとに、「発表の工夫」を評価する。 ・発表班の「ワークシート②原稿」のコピーをもとに、「補助資料の活用」「心情の深まり」「心情と行動のつながり」を評価する。 ・発表班へのコメントもまとめさせる。
	・発表の次時、活動の振り返りとして心情を全体でまとめる。	・各班の「ワークシート③評価シート」をまとめたものを配布し、心情を確認させたり、教員から各班の良かった点や改善点をコメントしたりする。
	・相互評価を、自班や個人評価に還元する。	・他班評価や自班評価を見て、個人で活動を振り返り、自己評価させ、「ワークシート④振り返りシート」に記入させる。 ・使用したワークシートをすべて提出させ、教員による評価を行う。

（２）考察

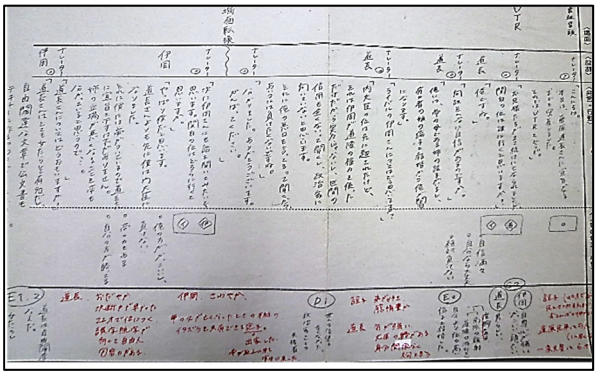
ア　今年度の実践のねらいと工夫した点

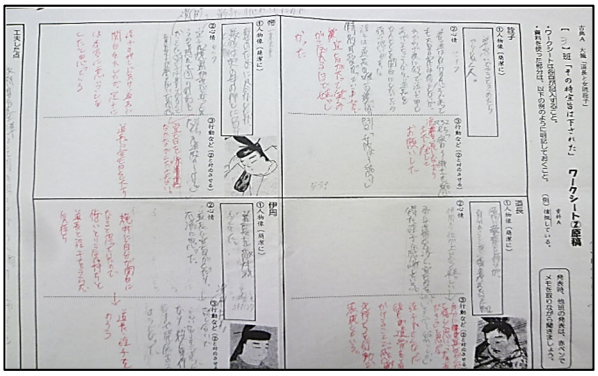
昨年度と活動の流れはほぼ同じであるが、課題として残った点を踏まえ、以下の３点で改善を図った。

①今年度の３年生は劇形式が初めてであることを考慮し、発表する場面を限定して〈道長に内覧の宣旨が下った場面〉のみを扱い、発表形式も番組化ではなく、単に「発表」とした。「ワークシートを読み上げるのみは不可」としたところ、すべての班がワークシートをもとに劇化した。

②ワークシートに記載する内容を、「発表の台本」とするのではなく、「登場人物の人物像・その時の心情・その心情を表す行動」の３つに分けて記入させた。

③発表班のワークシートのコピーをもとに、「補助資料の活用」「心情の深まり」「心情と行動のつながり」の観点で、発表後にワークシートに記載された内容を対象として相互評価させた。





【写真３　最終的に提出されたワークシート（左：昨年度、右：今年度のもの）】

イ　成果

昨年度のような表現面での自由度の高さはなくしたものの、昨年度と同様に生徒が主体的に取り組み、受身の読解にとどまらない、意欲・積極性・創意工夫など生徒の力を多方面で引き出すことができたと感じる。また、ワークシートの作成から発表準備をする中で理解が深まっていき、発表では詳細な人物や心情の理解、その心情に基づく行動を表現できていた。そして発表の次時に行った振り返りでは、他班からの評価を確認させ、教員から各班の良かった点や改善点をコメントすることで活動のまとめとしたが、一生懸命活動に取り組んできたからこそ、還元された評価やコメントに集中し、自分の活動を振り返る様子が見られた。なおこの振り返りを踏まえて自分のワークシートに赤字で加筆修正したワークシートを提出させ､｢学びの深まり｣の観点から教員による評価をつけたが､振り返りの時間を通して、各登場人物の心情理解を深く、かつ多面的に広く捉えることができたことが、ワークシートの記載からうかがえた。

【写真４　発表の様子】

ウ　今後の課題

各班のワークシートの記載内容により相互評価を行うこととしていたが、その記載された内容と、その班の発表内容との間に大きな差があった。どの班もワークシートの記載内容よりも発表内容の方が、理解が深まっていたのである。その原因は、ワークシートは発表準備を行う前に作成しており、その後ほとんど手が加えられなかったため、発表の準備中に進んだ理解の深まりが加筆されていなかったからである。また、ワークシートを用いて評価することや、どのような観点で評価するかについては、活動を開始する際に生徒に伝えてあったものの、詳しい基準（ルーブリック）を示す時期が遅くなってしまったことも、ワークシートへの書き込みを甘くしてしまったと思われる。結局、発表内容が良くても、相互評価はワークシートの記載内容で行うため、理解の深まりが評価に反映されなかった点が残念であった。

この反省を受け、ワークシートの記載内容と発表内容との差が大きい点について、以下のようにさらに改善したい。

・ワークシートを作成する段階で理解をアウトプットさせ、さらに脚本化する段階で再アウトプットさせる過程を通して「自ら深く読解する」ことが活動の目的であるため、考えた痕跡が分かることが必要だと十分に伝えた上で活動を進めさせ、得た気づきをその都度ワークシートに加筆させる。

・詳しい評価基準（ルーブリック）を早めに提示し、途中でワークシートの記入方法を確認させたり見直したりする時間を設けることで、活動を通して考えたことや気づいたことをきちんと評価につなげられるようにする。

３　２年間の実践を通してのまとめ

（1）「やって良かった」脚本化授業

脚本化授業により、生徒が生き生きと取り組み、意欲的・積極的な姿勢が養われ、能動的な読みにつながることを実感した。脚本化するためには、登場人物になりきって台詞や動きを考えることになる。資料から読み取った情報を総合したり、班員と意見交換したりする過程を通して、出来事や登場人物の人物像・心情・行動を自分なりに解釈することが自然と必

要となり、それは本文の記述をただ受身でなぞっているだけでは到達できない主体的な読み、新たな発見や思考の深まりをもたらす読みにつながる。また、本文には記述されていない行間を読むこと、つまり様々な事物への「これはどうだったのか？」という細部への気づきや想像力も同時に自然と必要となり、昔の人を身近な存在として捉える体験をも可能にするのが、脚本化授業の魅力ではないか。昨年度も今年度も３年生での実施だったが、生徒の古典への興味が増し、その後の学習意欲も高まったと感じる。

（２）脚本化授業の留意点

活動が「おもしろい」からこそ、本来の目的と離れたウケ狙いのおもしろさに流れてしまう可能性がある。そうならないためには、「なぜこの活動をするのか」「どのような力を付けてほしいか」という活動の意義を丁寧に説明し、生徒と共通認識をもつことが大切である。

また、論理的な読解のためには、発表して終わり、というやりっ放しにしてはならない。例えば生徒の解釈で、「ここまでは言えるがここからは拡大解釈である」など、生徒だけでは判断が難しいものもある。「何でもあり」の読みになってしまわないよう、振り返りの時間を設けて各班の良かった点や改善点を全体で共有し、自分の活動に立ち返らせることが重要である。

おわりに

振り返りシートに記載された今年度の生徒の感想（抜粋）である。

・人物像や感情についてこのように深く考えたことがなかったので、いつもと違う形で本文理解を深めることができ、良いきっかけになった。今後は本文を読むときにその点を押さえて読みたい。
・その時に登場人物がとった行動や気持ちを、劇にする過程や劇を評価する過程で考えることができた。劇にしてなりきると自然と心情が表現されていて、おもしろかった。
・発表ではワークシートに書いていないものも劇にしていたので、もう少しワークシートに書いておけば良かった。これからはワークシートをしっかり書いて、根拠にもとづいてやりたい。

これらの感想を読み、振り返りの授業の段階でこちらの意図が本当の意味で生徒の腑に落ちたように感じた。活動の意図を真に生徒が理解している状態で、もう一度他の作品で脚本化授業をやってみたい。もちろん時間との兼ね合いもあるが、活動に慣れていれば、話し合いがスムーズに進んだり、家で各自が進めてきたりすることもできるだろう。

「作品を自ら深く読解する」という目的のもと、古典授業において脚本化を実施し、評価の面など反省点や課題もあるものの、生徒が自ら自然と深く考えることができただけでなく、能動的に読む楽しさにも気づかせることができた。この経験を活かして今後も主体的・能動的に深く読解していってほしいと思うともに、授業をさらに工夫していきたい。